

洞爺湖ビジターセンター 2014年度 自然ふれあい通信

洞爺湖ビジターセンター・火山科学館では毎月1回、洞爺湖周辺の自然と親しむ「自然ふれあい行事」を開催しています。その様子を少しご紹介します。

6月14日(土) 金比羅山+四十三山散策



ぐずついた天気が多く、北海道でも雨の多い季節となりました。曇り空のもと、洞爺湖ビジターセンター・火山科学館6月の自然ふれあい行事、金比羅山+四十三山散策を行いました。今回の行事では2つの場所を散策しました。まずは2000年(平成12年)に噴火した金比羅山火口を歩き、噴火してから14年後の様子を観察します。次に1910年(明治43年)に噴火があった四十三山火口を歩き、噴火してから104年後の様子を観察することで、噴火口が90年の間にどれほど様子が変わるのかを実感します。金比羅山も四十三山も「山」と名がついていますが、どちらも有珠山の一部で、有珠山の子供みみたいなものです。



右：金比羅山の金比羅A火口(通称有くん火口)
左：四十三山の第20火口



樹木図鑑と照らし合わせて木の種類を調べました。
金比羅山火口のまわりにはまだ若い木しか生えていません。

2000年噴火から14年が経ち、現在の金比羅山噴火口の様子は上の写真のとおり、水のたまった火口がはっきりと見えます。また、火口のまわりには樹高1~2mほどの木々が生えており、参加者の皆さんとどんな種類の木が生えているか調査しました。その結果、主にドロノキ・シラカンバ・ネコヤナギという木が生えていることが分かりました。有珠山周辺地域ではこれらの種類の木々がパイオニアツリーとして生えてくるようです。この木たちはこれから立派な木に育って、新しい森林を形作ってゆくでしょう。

四十三山は明治43年の噴火の際に誕生した山で、その時の噴火で洞爺湖温泉が発見されました。噴火から104年が経ち、現在の四十三山ではイタヤカエデ・ミズナラ・ハリギリ・ミズキなどが観察できます。また、寿命を迎えたため倒れているドロノキもありました。噴火から100年以上経過した四十三山火口はもう立派な森林になっており、金比羅山と植生と比較するとその回復の様子を実感できます。

洞爺湖周辺は度重なる有珠山噴火の影響により、場所が少し離れるだけでも見られる植物や火山活動の痕跡の様子が違います。洞爺湖周

辺を散策する際は、いくつかのコースを歩いて火山活動と植生回復の様子を感じてみることをおすすめします。



四十三山にはたくましく育ったたくさんの種類の木々のほかに、今も40度ほどの噴気を上げる噴気孔があります。

